

詩時評

第16回

月は人の心で
あったはず

松本衆司

夏目美知子詩集『ぎゅっとでなく、ふわっと』（編集工房ノア）を読む。「空の鳥 食卓のリンゴ」を引く。

卓上で、リンゴを真半分に切る。ナイフが最後にたてる音を避けて、ぎりぎりまで止め、あとは、手首を捻って、二つに割る。／／鳥がしきりに鳴き交わす。遠く、近く。何種類も。／／明るい高い声だ。何の鳥かは判らない。／／先に、夫が「てっぺんかけたかと二回聞こえた」と言った。私も聴きたいと思つたが、それきりだ。／／俯いてリンゴの皮を剥く。この姿勢に入ると、心の納まりがいい。編み物でも、煮たきものでも、読書でも、同じ姿勢の中に、考え事が隠れている。私はその考え事の中に住んでいて、

時々、外と中が判らなくなる。／／先に何があるのか。「葉っぱのフレディ」という物語を、私は、好きになれない。／／食べやすいように薄く切つたリンゴは、おなかに取りまり、私は思い煩いを振り払い、一日を始めるために立ち上がる。／／雨の日は、鳥は来ない。／／そんな時どうしているのか、想像もつかないけれど、／／鳥は鳥の規模で、適正に生きているに違いない。

アンニユイという言葉が浮かんだ。アンニユイとは無論、憂鬱・倦怠と訳される十九世紀末の西欧の文学のキーワードの一つだが、派生的に退屈・無聊とも訳せるのではないが、生を見詰める想念はそこを通過して立ち上がりもする。つまりそれは、魂との対話の時間である。

辻岡真紀子川柳句集『風の残り香』（新葉館）を読む。

自販機がひとり佇む夜の道
びかびかのバナナ夜空にぶら下がる
身の上をささやき交わす落ち葉たち
ひとを待つ冬の噴水凍るまで
子が菓立ち白さの目立つカレンダー
春うらら猫といっしょに大あくび
デザートで涼んで財布寒くなる

秋風が祭りのあとを整理する

文学の基本は「文」である。それは詩にも、随筆にも、俳句川柳にも、短歌にも変容する。辻岡真紀子は長年、大阪文学学校で文学を学び、詩もエッセイも川柳同様に巧みだ。テーマに関わらずランダムに引いたが、それぞれに楽しめるライトヴァースだ。

後藤光治詩集『吹毛井』（土曜美術社）を読む。この欄の十回目で取り上げた詩集『松山山窪』（鈺脈社）の続編である。「楯（たぶ）の木」を引く。

東郷の／谷川沿いの斜面に／大きな楯の木があった／夏の盛りには／甘い実を黒々と付けた／／あの楯の木にねえ／／男衆が何人も取り付いてね／／実をちぎって 弁当箱に溜めているんだよ／／隣の爺さんまでもね／／母はいつもこう言って／／眼を細めて／／可笑しく、嬉しそうに話すのだった
／戦時下の 食糧難の日々であった／／僕は一本の楯の木に／／大の大人が／何人も乗っている図を想像した／／確かにそれは滑稽であった／／同時に 村人の／楽天的な逞しさを思った／／それは ミレーの宗教画のような／美しい一幅の絵であった／／あの母の／笑った顔を思い出す度に／僕は人生

が愛おしくなる／―生きるというのもまんならでは無い／そんな気がして

情景が眼に浮かぶ。あるがままの自然の中で、自然の恵みを得ながら、自然と共存して人々が暮らしている。今更ながら、あるべき光景であろう。単なる懐古ではない。人としての生き方の提案である。

市原礼子詩集『フラクタル』（濤標）を読む。
「山の辺の道」を引く。

シゲお祖母様は／銀色の髪をきれいに結びあげ／黒丸のカモジを付けていた／折れ曲がった腰を時おり伸ばし／晴れやかに私を見下ろす／若い頃には／恋する若者が屋根から忍んで来たとか／庭を向いて端坐していたあの時／何を思っていたのか／おだやかな顔で遠くをみていた／波乱の生涯を知ったのは／ずいぶん後のこと／生きていれば／百三十七歳になる祖母と百五十歳祖父／そして父から私につながる／ひとすじの道／この地にも来たにちがいない／小さい丘から山並みを眺めていると／そんな気がする／石上神宮を抜け／山の辺の道の始まる／標識の前で思案する／畑の向こうの窓が開く／見知らぬ人が腕をふり道案内／この辺りの人は古代から／迷い

人を見てきた／布留川の深い谷を覗き込む／裂け目の流れに目をうばわれる／一瞬谷底に落ちてゆく／谷は人の心を削り／道はのどかに今に続く

人々の生をどのようなものとするか、哲学や宗教の言葉に自らの喜怒哀楽を委ねながら人は生きるのだが、この詩は、そのような解釈を超えて、ただ父祖の地の「谷」と「道」の風景の中で人生をさりげなく描く佳作だ。

吉田義昭詩集『幸福の速度』（土曜美術社）を読む。「日没まで」を引く。

山頂で気高い富士山を眺め三つ峠から下山／谷や橋を越え国道沿いの喫茶店に入りました／後ろの景色は切り取られた小さな氷河期風名溪谷／川の水まで時間を遡った旅をしているようです／河原に立つ夕日を浴びている高い落葉松の木／私は今 私の「雄大さ」のなさに気づきました／／「風の棲家」という名前の店でした／静けさを響かせた永遠に続きそうな川の音／民家のような店の入口の通り道／「注文は日没まで」と書かれた扉と／老夫婦と二匹の猫が私たちを迎えてくれて／私は今 遙かに遠い日々を想い出しました／／日の出に起き日没に眠り私を移動させた旅二十歳の頃

初めての欧州一周旅行の初日／アテネ郊外の猫たちが遊ぶ公園の前で野宿／「開園時間」は日の出から日没まで」の短い時間／あれは四十五年も昔の一日十ドルの旅なのに突然／私は今 闇夜に鉄門の外で眠る私を見つめました／／店では山仲間とアンデスの音楽を聴きました／あの遠い旅の後で私は私の人生の外でも旅人でした／私の「非凡さ」を捨て平凡に四十二年も東京で働き／時代を遡り今もまだ旅の途上を歩き怯えているようです／想い出は想い出させれば想い出になりません／今の私は過去の時間を変えられず甲斐の山里にいます

人生の時を経て、誰もが似たような感懐を抱くのかもしれない。無理のない文体で、さりげなく「生きる」という人間の真実のありかたを描く、秀逸な詩篇群の一篇である。

『小手鞠』十八号を読む。大阪文学学校の中塚鞠子が担当する昼の詩・エッセイクラスに在籍した方達の集いの同人誌である。本多稲子の「鳥」を引く（一部省略）。

かれこれ八十年前の昔の子供の頃を思い出しました。／「ふくろう」は「コウズ」と言っていました。夜中にホーホーと鳴く声の不気味で怖かったです。「真黒闇

に目だけギンギンに光つちよるげな」と子どもたちは怖がっていました。／「はよ寝にヤコウズが来るぞ」と言われて、いそいで布団にもぐりこみました。／カラスは死

人の使いだといって、人が死ぬ前に夜中にその人の家の屋根の上でカアカアと鳴いて知らせるのです。病気で寝込んでいたおじいちゃんが死んだ前の晩に、屋根の上でカラスが鳴いて知らせてくれたと学校で友達

が言っていました。／村の山の麓に火葬場がありました。高い煙突のまわりをカラスの群れが飛んでいて、煙突から黒い煙が空高くのぼっている時がありました。人々は「又誰かのうなったね」と噂しました。／

近頃高田郁さんの本が好きで読んでいます。／江戸時代、鳥の鳴き声を人の言葉に置き換えて聞く「聞きなし」と呼ばれる遊びが行われていたそうです。家で鳥を飼って暮しにゆとりのある旦那衆の遊びだったんでしよう。／メジロ……長兵衛 忠兵衛 長忠兵衛／ツバメ……土喰って虫喰って 渋い／ヒバリ……利取る利取る 日一日一日／センダイムシクイ……焼酎一杯ぐいーつ／コジユケイ……ちよつと来い／ホホジロ……一筆啓上仕り候／「あきない世傳 金と銀」より

鳥と人との素朴なつながりと「聞きなし」

の面白さを味わう。里山の暮らしに寄り添う自然への頌歌のような心地よさがある。鳥の囀りを聞き做す人々の心が懐かしい。

『詩的現代』三十一号を読むともなく頁を繰る。特集は「大島渚の時代と映画」。各論者の視点が違っておもしろい。それぞれの論者の青春に私の青春が重なる。水みどりの「半月」を引く。

わたしの／瞳に／沈んでいる／いくつもの／夜／いまは亡い／人たちの／見果てぬ夢に似て／半月が／吊される／音もなく／しずかに／夜が／発酵している

行間は示せないが、そこに思いが宿る詩だ。李白の五言絶句に「静夜思」という詩がある。その後半「挙頭望山月 低頭思故郷（頭を挙げて山月を望み頭を低れて故郷を思ふ）」空にかかると月を眺めるとはつながることだ。離れている二つの地点が心でつながるから。今も昔も、こうして月に思いを寄せる。言葉はわずかでいい。

二〇一九年十二月発行の『コールサック』は記念すべき百号である。執筆者は百人を超え、頁は三百頁を超える。主宰する鈴木比佐雄の詩的精神と弛まぬ努力によって導かれた

歩みは尊い。その記念号に相応しい淺山泰美の「宿」を引く。これもまた、月の詩である。

宿の／古井戸の中に映る月が／夜毎に欠けていくのを見ていた／夜更けと夜明け／幼い日はそうして過ぎた／井戸に／桜の花びらの散る春の宵／初めて心を覗いた／花はじきに／藤にかわり／燕が軒場に巣を懸ける初夏が来る／七月八月の油照り／井戸の水も／涸れたように／少のうなる／風も刻も止まる昼下がりに／午睡の夢に浮かぶ昼の月／ようやく 秋風の立つ頃／十六夜の月の切れ端が井戸に揺れる／庭のいろはもみじが色づきはじめ／あつという間に／紅葉に埋まる井戸／その上に／柔らかな初雪が降りかかる／今年の雪もあたたかい／そして一年／宿屋は また／せわしゅうなる

かつて、人々の暮らしは月とともにあった。故に朔から晦まで、月に頼り月を愛でる呼び名があった。そのように、月は人の心であったはず。今、私たちが都市化した暮らしの中で寄り添う月を見ないとするならば、それは人の心を見ないことになりはしないか。月の詩を読んで、考えさせられた。

『Z記』三号を読む。前号より五年を経での

発行であるらしい。そのことに驚く。田能美子、中谷恭子、永井章子、吉井淑、李明淑の女性ばかり五人の詩誌だ。中谷恭子の「やわらかい」を引く。

黄色い野原に牛がいる／ゆるやかな丘に並ぶ枇杷の木／海からの風に大きな葉がパラパラと音をたてる／実が熟している／牛の尾は紫色で／ゆつくりと揺れている／細い足 細い腕 細い身体 線のように細い／頭だけが大きな男が泣いている／小さな眼／次々と花が咲いて／夏が来る／今年で終わる夏だ／男と私の間が測れない程遠くなって／朝の枇杷を一人で食べる／冷たくして／丁寧に皮をむいて食べる／夕焼けの中に浮かぶいくつもの塔／貯金箱のような細長い直方体／小さな窓が五個ついている／コインを入れてもってペンまで届かない／音は下の方からひびいてくる／塔は少しずつ左に傾いている／水玉のソックスをはいて／むささびが飛んでいく／塔から塔へ／島から島へ／巢の中へ帰って行く／荷物を捨てる／牛を捨てる／私は／やわらかい肉になる

生の断面の大胆な切り口に、事実と幻想の不思議な光景が浮かぶ。それが現実なのか。生き死にの狭間に有機と無機のそれぞれが醸

し出す微妙な匂いが漂う。

「富上芳秀詩集『芭蕉の猿の面』(詩遊社)を読む。巻頭の詩「詩人ではない詩人」は詩集の帯文でもある。「昔、絵のない絵本に出会った。形容矛盾の言葉の不思議な美しさに魅かれた。言葉の深みにはまった最初の経験である。(略)それから、同じようなものに出会うことがたくさんあった。けどものでもないけど。女でない女。愛でない愛。そんなものが無限にあつて、言葉の描き出す幻影を無数に見ることができた。そうして、私は詩ではない詩を書く詩人でない詩人になった。」富上芳秀という詩人の素朴な思いが読み取れる。「月の海から見た芭蕉」を引く。

私は賢者の海の海岸にいた。それから、私は蛇の海に行った。今、私はお神酒の海にいる。私の足は衰えた。私の心臓は衰えた。若い人たちは、どんどん私の歩いていく速度を追い抜いていく。待ってくれ、と叫ぶのは悔しいので歯を食いしばって歩いていく。私にできるのは、どんなに歩く速度が遅くなっても歩いていく意思を失わないことだ。古希を迎える私だもの、このスパーームーンの夜に、月の海岸に生きていて、江戸の芭蕉の句の世界を見ることは難しいことではない。『荒海や佐渡に横たふ天の

川』とは違って、実際は、天の川は佐渡に突き刺さっている。いや、荒海なのに雲の上の天の川は見えるのか。もちろん、芭蕉には見える。もちろん、私にも見える。芭蕉が、「おくのはそ道」の旅、元禄二年(一六八九)七月七日、七夕の日(新暦八月二十一日)、直江津の佐藤元仙宅で催された句会で吟じたが、終日雨、夜には風雨ともに激しくなったのだから、天の川は見えなないのだ。だが、芭蕉には見えるのだ。その芭蕉の句の世界は私にも見える。秋であつて、荒海も佐渡も天の川も見える。私が二〇一八年一月三日の地球に存在しながら、月の海の海岸を彷徨し、江戸時代の芭蕉の荒海の佐渡や天の川を見る事ができる。それが詩の世界なのである。

秀逸な散文詩である。富上の求めるリアリズムとアンチリアリズムの融合と葛藤が、歴史の向こう側とこちら側との重なりの中で描かれ、そこに「私」の来歴と今の「私」の現実がさりげなく重層し、この詩の世界の味わいを一層豊かなものにしていく。

芭蕉は自らの蕉風俳諧を究め、広める旅に於て。富上も主宰する「詩遊」を中心に現代の詩を究め、広める。芭蕉と対峙する富上芳秀の真骨頂である。